

に、占いの料金として一万円を請求されたのである。この料金が安いのか高いかは一概には言えないにしても、〈占いの街〉の相場から言えばかなり高いものである。これに対して、〈占いの街〉では料金が明確化されており、かつリーズナブルな金額で、安心して占いを受けることができるのである。大体、学生料金—「学生割引」がなされている—で二千円ほどで、一般料金でも三千円で料金設定がされているし、短時間コース—10分くらい—であれば一千円で、カップルであれば四千円で、占ってもらえるのである。「ジュム占いの街」などでは「チケット制度」が導入されており、料金体系は全くの透明である。店の中に入るのにチケットを買う必要はなく、自分の気に入りの占い師がいなかったりして、途中で気分が変わり占いをしたくなくなれば、簡単に店をでることができ、占ってもらいたい時に、はじめてチケットを買えばいいのである。したがって、冷やかし半分で店舗に入ってもいいのである。こうした点も、〈占いの街〉に入りやすくしていると思われる¹⁶⁾。

端的に、〈占いの街〉という占い空間の形態の特徴をまとめると、大きく五つに集約できる。第一に占い師たちをある一つの空間に集合的に配置する集合的形態をとる。第二に占い師たちは個々別々の個室に配置されている。第三に〈占いの街〉という空間は外観的に入りやすい店舗である。第四に占い師を見て選ぶことのできるシステムである。第五に料金の明確化である。こうした特徴を持つことで、占い師に占ってもらいやすくしていると思われる。当然、これらの特徴をすべて持つのは〈占いの街〉という占い空間だけであり、これまでの占い空間の形態—「宅占」、「街占」、集合的形態をとらない「テナント」、「イベント」—とは異なることになる。これらの特徴が設けられたのは、「ジュム占いの街」からであると思われる。そして、その後、「ジュム占いの街」に影響を受けた〈占いの街〉の形態をとる店舗は、

これらの点を備えてきている。こうした形態への変容は、占い師に占ってもらうことの意味ないし感覚の変容をもたらすことになると思われる。このことを表しているのが、上での若い女性の語りである。上述の語りには言外の意味として、占いを楽しむものとする感覚が含まれているようにも見えるのである。つまり、〈占いの街〉という占い空間は占い師に占ってもらうことを「占い本」の延長として位置づけて、占いを軽い感覚で受けられることのできるような形態にしたとみなすことができるのである。そして、このことは占いに対する需要を拡げることになりうる。

四. 占い需要の拡大化

筆者の調査から、占いの店舗を利用する「客」の特徴には大きな傾向があることを指摘できる。その「客」の特徴とは、「女性」であるということである。すなわち、客の九割近くを女性が占めているのである¹⁷⁾。そして、神戸などの繁華街にある〈占いの街〉では、客のほとんどが一〇代から二〇代の女性となる。この客のほとんどが一〇代から二〇代の女性であるということは、都市部の繁華街であるということと〈占いの街〉という空間性という二つの要因が働いていると思われる。筆者の「石切神社」参道での調査によれば、ある占い師は複数の店舗を持っていて（その店舗はその占い師一人で営業しているようである）、繁華街（「難波」と「石切」とでは客（大半が女性である）の年齢層が異なり、繁華街では若者が多く、「石切」では中高年齢が多いと語っていた。ここから、比較的大都市の繁華街にある占いの店舗であれば、同様の結果がでると考えうる。そして、〈占いの街〉という形態であれば、容易に占いを受けれるようにしうるから、上記の「客」の特徴傾向にも拍車がかかるだろう。すなわち、〈占いの街〉という占い空間形態と「客」の特徴が女性—とくに一〇代から二〇代であるというこ

16) 占い師間の差異化をはかるために、あえて格調を高くするというやり方—例えば「宅占」にしたり、予約制のみにしてしまうなどのやり方—もありうる。おそらく有名な占い師がこうした方法をとっていると思われる。

17) 相談内容にも大きな特徴があり、それは「相性」ないし「恋愛問題」である。また、こうした相談内容はある程度普遍性があるようであり、例えば「石切」でも「相性」の依頼が多いということが聴き取りからわかっている。